

「定置網漁業国際交流事業」

— 定置網発祥の地からのメッセージ（富山県氷見市）『漁港』より抜粋 —

○ 400年の歴史をもつ氷見の定置網漁

天然の生け簀といわれる富山湾では300種以上の魚が水揚げされ、氷見沖にはこの恵まれた漁場を活かして大型・小型併せて45カ統の定置網が仕掛けられており、港には、春のイワシ、夏のマグロ、冬のブリなど、四季を通じて豊富な魚が水揚げされます。威勢のいいセリの声で始まる氷見の朝、活気づく市場から、氷見ブランドの美味しい魚が全国の市場へと届けられています。

こうした「魚の都・氷見」の水産業を支えているのが、約400年前から始まった定置網漁法で、幾多の改良が重ねられ発展をとげてきました。

明治34年（1901年）制定の漁業法によって「定置網」という言葉が用いられるまで、富山湾沿岸では天正年間より「台網」（だいまみ）と呼ばれていました。網が画期的な発展を遂げたのは、明治40年、従来敷設・操業されていた台網を整理し、当時宮崎県で大漁が続いていた新型「日高式大敷網（三角網）」が導入されてからです。

その後、大正初年頃、氷見の阿尾の上野八郎右衛門が日高式大敷網の欠点を改良し、網口など開口部を魚が逃げにくいように小さくした「上野式大謀網」

（この上野式が今の「越中式定置網」の原型となっています。）を考案、ついで、登り網を取り付けた「落とし網」が大正後期から昭和初年頃に出現したと推測されます。その後、この定置網が広く日本全域に普及しました。昭和40年代には「二重落とし網」が考案され、それに伴い網の素材も改良が図られ、大規模な網の敷設が可能となりました。

○ 環境に優しい漁法

底引き網のように魚を追いかけ、そこにいる魚のほとんどを捕獲する漁法とは異なり、集まってくる魚を待ち受ける定置網漁法は捕獲する割合が一旦網に入る魚の2割程度といわれ、また、網目の大きさによって対象魚を決め、漁獲量のコントロールが可能です。

また、潜水調査によると、網周辺には小魚が群がり、ロープには貝がいっぱい付き、イカなどが卵を産み付けているところも多く見られ、網に付着する海藻や稚貝などが魚礁の役目を果たし、魚の憩いの場所となっています。

資源の再生産を促し資源確保につながる利点がある定置網漁法は、捕る漁法であると同時に増やす漁法であり、限りある水産資源を持続的に利用でき、まさに環境に優しい漁法であると注目されています。

そのほか、魚をなるべく傷つけずに生きたまま水揚げでき、鮮度の高い魚介

類が提供できること、働く人たちが毎日帰宅することが可能で省燃費・省力化・合理化に向けた取り組みも行われていることも定置網の特徴であり、利点であるといわれています。

○ 氷見定置網トレーニングプログラムの実施

本市が平成12年度から14年度までの3ヶ年計画で実施している「氷見定置網トレーニングプログラム」は、本市発祥の環境に優しい資源管理型漁法として注目されている「越中式定置網」を核とした国際協力や都市漁村交流などを行うもので、次の5つの主たる目的を掲げてスタートしました。

- ・ 開発途上国等への技術指導と普及を通じた国際協力
- ・ 定置網の優れた特性の評価、研究、情報発信
- ・ 海洋環境問題への対応策の研究
- ・ 魚食文化の交流
- ・ 漁業の活性化による地域活力の創出

<平成12年度の実績>

● 氷見定置網トレーニングプログラム実行委員会の設置

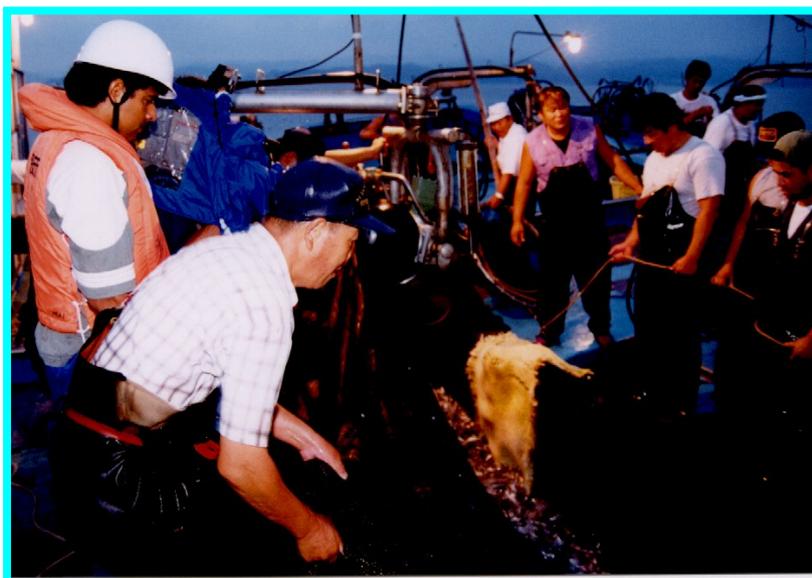
水産業関係団体、国際交流団体、県の代表及び学識経験者等で構成しており、会長の氷見市長をはじめ、各々の委員が事業の目的を共有化し、協力して事業を推進しています。

● 国際定置網実地研修の実施

中米コスタリカと中国遼寧省から5人の研修生を受け入れ、定置網漁業の現場体験や本市で行われている漁法についての学習会、製網工場・市場・水産加工工場等の視察、漁師や国際交流団体の会員とのディスカッション、網元の家でのホームステイ等の異文化体験などを実施しました。

研修生からは、「定置網は、自国の漁業の能率化を図るために有効であると考え。」、

「海底を浸食することなく漁を行えるところ



が優れている。」などの意見が寄せられました。

●シンポジウムの開催

市内外から400人が参加し、「漁業の未来と海洋環境」をテーマにしたシンポジウムが氷見水産センターで開催されました。

第1部の基調講演では、全国的、国際的な話題を中心に、海洋廃棄物などによる環境汚染の問題や水産資源管理の重要性について、第2部のパネルディスカッションでは、地域の漁業と海の環境をいかに守っていくかについて意見が交わされました。

その後、出演者と参加者による、漁業の発展と消費者の暮らしについての熱心な質疑応答も行われました。

●漁業研究講座の開催

漁業の役割について再認識し、その将来を展望するため、富山県が先進的な研究を行っている海洋深層水について、水産分野への深層水利用や深層水氷による魚類の鮮度保持、深層水の食品分野への利用についての2講座を開催しました。

現在注目を集めている分野の研究成果の発表に、市内の水産業者を中心とする約40人の参加者がその有用性について理解を深めました。

<平成13年度の実績>

●海外技術指導事業の実施

8月20日から30日まで、本市の漁業者や水産科高校生、ボランティア、漁協職員、市職員などで構成する交流団22人をコスタリカへ派遣し、氷見沖で実際に操業されている最大のものに比べおよそ100分の1のスケールの模型網を使った実地実験を伴う漁法指導を行いました。

まず、現地の漁師や研究者等に定置網の歴史や構造についての講義を行い、その後、屋外で模型網を木に縛り付けて網の仕組みを説明しました。その翌日には、実際に網を海中に設置し、コスタリカ初の定置網漁を行いました。

その他、コスタリカと日本、相互の魚料理を紹介する魚食文化の交流会も行われました。

帰国後、市民に対する事業報告会が開催されました。



● 定置網新世紀フォーラムの開催

北海道から沖縄まで、23都道府県からの漁業関係者をはじめとする1,100人の参加のもと、「定置網から考える環境と食料」をテーマに、「定置網新世紀フォーラム」が開催されました。

基調講演、パネルディスカッションやワークショップを通じ、定置網漁業を様々な角度から見つめ、その魅力や21世紀に求められる役割などについて議論を展開しました。

自然と共生していく社会を実現するための一助として、水産資源の持続的利用が可能な定置網漁法の有効性を再確認するとともに、定置網漁法を世界へ発信することの重要性が確認されました。

○ 世界定置網サミット in 氷見の開催

氷見定置網トレーニングプログラムの集大成として、「海でつなぐ世界と未来」をテーマに、国内外の定置網漁業関係者等（海外34カ国）の幅広い参加（期間中延べ3,000人）をいただき、11月23日から26日までの4日間、「世界定置網サミット in 氷見」が開催されました。

初日には、開会式後の基調講演で、野村一郎国際連合食糧農業機関（FAO）水産局長が「世界の食糧問題と漁業の役割」と題し、漁業が環境に対して責任ある対応をし、環境問題をリードしていくべきだとの認識を示され、グンナ・クーレンバーグ国際海洋法研究所（IOI）前事務局長が「海洋環境の保全を目指して」と題し、人類の共通財産であり生命を支える水産資源の管理と環境

保全に対する世界の人々の意識を高めていくことの重要性を訴えられました。

続いて、氷見市が前年交流団を派遣し定置網漁法の指導を行ったコスタリカから、定置網導入の事例報告をコスタリカ国立大学のアレハンドロ・グティエレス教授にいただきました。教授は1年間にわたる実験の成果や今後の課題について述べるとともに、漁業者の生活向上のために定置網を活用していきたいとの考えを示されました。

そして、最後のパネルディスカッションでは、佐野宏哉大日本水産会会長をコーディネーターに、定置網実施国スペイン、未実施国ケニアの代表、川口恭一水産庁次長、秋道智彌総合地球環境学研究所教授、堂故茂氷見市長の5人のパネリストが「21世紀の地球社会に求められる定置網漁業のすがた」について話し合い、「定置網は、持続が可能で魚類を選択的に捕獲することができ、21世紀の“責任ある漁業”の代表選手であり、国際的にアピールすることは大きな意義がある。」、「定置網は、沿岸に設置されていることから、人々の目に触れやすく分かりやすい。水産物を理解するきっかけにもなるので国内外に発信すべきだ。」、「定置網は氷見の背骨でありアイデンティティーである。世界へ発信すると同時に、この地で住む市民の自信につなげて欲しい。」、「定置網を設置するには、その他の漁業者との調整や行政と漁業者との相互理解、法の整備が不可欠である。」、「“グローバルに考えてローカルに行動する。”という言葉があるが、定置網を核にした氷見市の取り組みは、地域社会に密着しつつ、世界とも結びついている。」などの意見が出されました。



2日目は、午前中の氷見沖の定置網漁の視察から始まり、初めて魚を見た海外の参加者からは歓声が上がりました。その後、氷見漁港内の市場や製氷等の施設や氷見の漁業の成り立ちを展示した市立博物館など、漁業に関係のある施設の視察が行われました。

午後からの県立有磯高校を会場にしたポスターセッションでは、「世界の漁業

と食生活」をテーマにポスターを募集したところ、市内の中学校、高校、国内の大学、研究機関、水産団体、企業、国際協力機関及び国外の行政機関、研究機関などから約50点にのぼる出展をいただき、市内の中高生が海外の参加者と交流するなど、世界の漁業の現状について理解を深めました。

引き続き開催された食文化交流会には、日本を代表する料理人・道場六三郎先生をお招きし、国内外の魚料理を紹介しました。会場では、先生が交流会のために考案された創作料理が披露されるなど、魚食を通じた異文化理解と交流の輪がひろがりました。

3日目には、3つのテーマでセッションが開催され、セッション1「魚の取り扱いとマーケティング」では、氷見の沖じめなどの鮮度保持方法や衛生管理方法が示されるとともに、流通等のトレーサビリティ（追跡可能性）を明らかにすることや消費者への教育などの重要性が指摘されました。

セッション2「持続的資源利用に向けた定置網漁業の技術的課題」では、網の管理技術者の養成が必要であるとの指摘や、導入コスト削減のために各国にある材料で網をつくることも可能であるなどの意見が出されました。

セッション3「定置網を通じた地域振興と国際協力」では、かつて氷見の漁業者が海外へ技術普及に出ていたことが紹介されるとともに、国の状況に合わせた網の改良の必要性などについて議論されました。

また、会場からも多数の意見が出されるなど、およそ6時間にわたって白熱した討論が展開されました。

最終日には、「世界定置網サミット in 氷見」宣言を採択し、「海との共生」のための5つの取り組みの推進が確認され、サミットは閉幕しました。

- ・海洋環境の保全及び水産資源の持続的利用等に向けた対応策の研究と実施
- ・世界への環境にやさしい定置網漁法の発信と普及
- ・世界の地域振興に向けた定置網技術の開発と適用
- ・国際交流・協力の推進を通じた定置網技術の向上と人材育成
- ・魚食文化の交流による水産資源の有効利用の推進

